
赤い糸

サザビー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

赤い糸

【Zコード】

Z5106D

【作者名】

サザビー

【あらすじ】

21世紀まで増加の一途を辿っていた世界の人口は、世界都市部爆破テロを期に、減少し続けていた。事態を重く見た国際社会連盟は、人口増加計画として西暦2101年に世界共通制度^{えんじゅ}・縁授^{えんじゅ}を樹立、各国に国際人類学研究所を設立した。試験的に運用が始められ、10年の歳月が流れた。

プロローグ・在りし日の約束

死は、生ある限り必ず訪れる。

舗道の片隅をささやかに彩る草花も。

夏の強い日差しを浴びて、元気に飛び回る昆虫も。

大自然溢れる草原を駆ける捕食者と、追われる獲物も。

人間も例外ではない。

事業で大成功し富や名誉を掲げ、人生を謳歌している人間も。

リストラを受け定職にありつけず、借金がかさみ、毎日の食料調達に汲々としている人間も。

死は唐突にやつてくる。

死をそれと理解し、恐れもなく迎え入れる・・・そんな人間は稀である。その稀な人間の一人であろう人物、楠名ちなみ（くすなちなみ）の人生は今までに、幕が降ろされようとしていた。

黒く艶やかな髪に、雪のように白い肌。曲線を描いた長いまつ毛は、大きな瞳を尚美しく誇張する。街などですれ違うと思わず振り返ってしまう美女がいるが、ちなみはその中でも上位の部類に入るだろう。

彼女は今、病院のベッドにその身を横たえていた。

呼吸器を付け、腕からは点滴などの管が生えて見るからに痛々しい。ベッドの周囲には心電図をはじめ、様々な医療機器が存在を主張するかのように規則正しい音色を奏でている。160cmの身体から洩れる吐息は熱を帯び、そのサイクルは早い。

気怠そうに開けた瞳の見つめる先に、一人の男が立っていた。雲に隠れていた月が顔を出し、その明かりが男の顔を照す。茶色の髪は乱れ、走つて来たのか少し呼吸が荒い。

彼の瞳からは涙が溢れでて、目をウサギのそれのように真っ赤にしていた。顔をグシャグシャにして子供のように嗚咽を堪えながら泣き続けている。

『安心・・・して』

『またすぐに・・・逢えるよ』

ちなみは優しく微笑みを浮かべながら、彼・・加古川理在・・に言葉をかけた。

そつ言ひとけちなみは目を閉じた。瞼の裏側に理在との思い出が上映される。

最初に映し出されたのは、ランドセルを背負つた男の子。小学生の

理在だ。ちなみの隣で気難しそうに眉間にシワを寄せて、誰に言つでもなくブツブツ何かを呟いている。

「 - 」の日は学校で先生に怒られて、ふてくされてたんだ -

舗道に転がっていた親指大の石ころを蹴飛ばしながら歩いている。次の瞬間、何を思ったかいきなりその石ころを思い切り蹴飛ばした。スピードにのつた石ころは、空気抵抗を受けつつも勢い良く飛んでいき、前を散歩中のプードルにクリーンヒット。飼い主には怒られるわ、理在は犬に足を噛まれるわ、背負つて病院に連れていくわで大変だった。

「 - あの時も大泣きしてたね - 」

場面が変わり、今度は中学生の理在が現れた。授業を受けているフリをして、ノートに漫画のキャラクターを描いている。

「 - 背がちっちゃくて、いつも小学4、5年生くらいに間違えられてたよね - 」

次は葬式のシーン。理在達理在達が中学2年生だった頃、小さい頃からよく一緒に遊んでいた海野凍夜うみのひやという同級生の通夜だ。近所にある土手の広場でサッカーをしていた時、5才位の男の子が川に落ちたのを見た凍夜は、一瞬も躊躇する事なく極寒の川に飛び込んだ。正義感の強い凍夜のその行動により周りにいた大人達も事故に気付き、男の子は早急に救助され風邪を引いた位で助かつた。

凍夜は5時間後、500m先の水面で物言わぬ姿で発見された。服に釣糸が絡まつていて大量に水を飲んでいた。

通夜の最中、理在はずつと泣いていた。ちなみも悲しかつたが、涙は不思議と出なかつた。

ちなみには理在の頭を撫でながら慰めた。

『安心して。また、すぐに逢えるよ。』

そんな気がしていた。

ちなみと理在は父親同士が古くからの友人で、物心つく前からいつも一緒にいた。幼稚園、小学校、中学校、そして高校。いつも、何処へ行くにも一緒にいた。一緒にいすぎて、時には双子のようになんく口して、お腹が痛くなるタイミングまで一緒にいた事もあった。泣き虫な理在は、いつもちなみの隣で泣いていた。ちなみは、そんな理在にいつも優しく微笑み慰めた。安心して、と。

理在は、ちなみのその言葉を聞くと、不思議と心に安らぎを覚え、笑みを溢した。

ちなみは理在に笑つていて欲しかった。理在の笑顔が好きだった。どんな綺麗な景色を観るよりも、それはちなみの目に美しく映った。

瞼のスクリーンに理在の喜怒哀楽が駆けぬける。

辛い現実に苛まれたあの時。感激のあまり喜びの涙を流したあの時。そんな毎日を一緒に過ごした、家族や仲間達、そして恋人。死の直前、その思い出は走馬灯のように脳を駆け巡るという。それは、死の間際にいる現状を、どうにか好転させようと過去の記憶の引き出しを開けまくり解決策を探そうとする、そんな本能的な現象だと何かの本に書いてあつたのを思い出す。

- もう限界・・かな? -

ちなみはゆっくり瞼を開くと、側に立っている理在を見た。

理在にとつてちなみは最愛の人であった。

ちなみにもとつても理在は最愛の人であった。

お互いになくてはならない存在。しかし、死という圧倒的な切れ味を持つ剣が、今二人を切り離そうとしていた。

死ぬ事自体に恐怖はない。ただ、理在と離れる事が怖かつた。

『またすぐに逢える』

ちなみは自分自身に言い聞かせていた。

理在は、拳を握りしめ、先ほどまでの泣き顔を、精一杯の笑顔に作り直して言った。

『またすぐに逢えるよ。必ず僕が逢いに行く。』

ちなみは微笑みを浮かべた。

心電図からは別れを告げる機械音が鳴り響いた。

耳障りな雑音の合間に聞こえる爆発音、そして悲鳴。接触不良テレビのように、映りの悪い映像が、徐々に鮮明を取り戻していく。それとともに、雑音も消え始める。

「なつ！？爆発！？」

少年は周りを見渡した。見知らぬ場所。造りの古いビルが立ち並ぶ大通りの舗道に、少年は立っていた。

銀行、デパート、生命保険会社などのビルから煙りが立ち上る。遠くのほうで、また爆発音が起きた。

ビルから吐き出された残骸により、道路交通も麻痺している。オフィスのデスクやパソコンなどもそこら中に散らばっていた。幾人もの人間と一緒に。

「な・んだ？」「はー？」

あちらこちらから聞こえる悲鳴や、呻き声が思考回路に流れ込んでくる。視界に映し出された情報だけを頼りに分析したとしても、死傷者は10や20ではすまないだろう。

映画の撮影じゃないよな、と思った瞬間、視界に女性が倒れているのが見えた。生きるのか死んでいるのかわからない人々がそこら中に倒れているのに、何故かその女性が気になつた。自分はこの女性を知っている、という確信にも似た思いが、彼の体を動かす。

男は彼女を抱き上げ呼び掛ける。彼女は男の叫びに応えるように口を開いた。

『・・・・・汐華蓮！！』

『・・・・・れん！！』

- - 何？聞こえないよ - -

『・・・ん・・・・。』

周りの爆発音などに邪魔されて聞き取れない。

- - えつ？ - -

『・・ん・・・・。』

頭部への衝撃と同時に、自分の名を呼ぶ声が鳴り響いた。

『爆発か！？』

汐華蓮しおはなれんは、状況を確認する為、咄嗟に後ろに振り向いた。

そこには顔見知りの同級生、菊谷善治郎が学校の席に腰掛けていた

『・・あ・・れ？』

善治郎は、心底冷めきった表情を浮かべ手に持ったライトペンで、前、前と合図している。

恐る恐る前に振り返ると、そこには『巨人』が立っていた。身の丈は2メートルを越えている。角刈りの男である。スーツに身を包んではいるが、そんなものでは隆起した筋肉を隠し通す事は不可能だ。巨人。華藏学園の生徒はこの堅物そうな教師をいつしかそう呼ぶようになっていた。

『巨人』こと香取優は蓮を見下ろしながら静かに言った。

『汐華蓮。放課後、職員室に来い。』

『はい』

蓮は、この上なく素直な返事をした。

『またあの夢を見たのか?』

若干興味があるのか、善治郎は口に近付けた「コーヒー」カップを途中で止めて蓮に問いかけた。

切れ長な目に眼鏡が栄え端整な顔立ちをし、髪は色素が薄く淡い栗毛、背も高く、成績優秀、スポーツ万能。頭のてっぺんから足の爪先まで秀才君の善治郎だが、初めて会った人は、必ずと言っていいほど冷たい印象を受ける。善治郎の身体にはそういうオーラが漂っていた。元々は、自身が完璧を目指すが故の行動なのか、人の言動に対して過剰に反応してしまう性格である。そしていらない反感を買つたりする。自分でそれがわかつていいる為、極力そうならないよう努めた結果が無関心を装つという行動だった。だが、今日の善治郎は関心事があるようだ。

『ほほう?』

『なんだ?』

『いや、善治郎君がそんなに俺の事に興味があるとは、と思つてね。

『別にお前に興味がある訳ではない。お前の見たといつ夢に興味があるだけだ。』

あーそーですかあ、といいながら蓮は窓の外に目をやつた。

先ほど突然振り出した雨は、少し激しさを弱めつつあった。放課後、職員室に呼び出された蓮は、担任である巨人の説教が終わるまで善治郎に待つていてもらっていた。短時間の説教 + 体罰が終わり帰路についた一人を突然の雨が襲い、目の前の喫茶店に非難したのだ。

『で、何度目だ。』

『男に告白されたのは初めてだな。』

『何の話だ、マヌケが。夢の事だ。』

マヌケって言われたあ、とウソ泣きしながら言った蓮は、チラツと伺つた善治郎の視線が、殺氣をこちらに向けているのを確認すると真面目な表情になった。少し考えてから口を開いた。

『5度目だな』

『いつから?』

『1週間位前からか』

『ほほ毎日か。あの模様が出てからだな』

『ああ、名紋つてヤツ?なんか胡散臭くねえか、あの縁授つての?オレあーゆーの苦手。女なんか好きそつだけど。』

蓮は怪訝そうに言った。

『胡散臭いか。』

俺は結構興味があるがな、と言いながら善治郎は鞄の中に入れてい

た国際社会連盟配布のパンフレットを手に取り、書いてある内容を蓮に読み聞かせるように朗読し始めた。

今世の記憶を管理します
前世の記憶が得られます
いますぐ名紋取得を

・名紋とは眼球に描かれた赤い華の形をした痣で、前世に、ある特殊な方法を用いて眼球に自身の名前を記し残す事により、現世に生まれ落ちた後も、眼球に前世で記したものと同じ紋章が浮かび上がります。生まれた時から浮き上がってる人もいれば、何かの原因で、後から浮き上がる人もいます。

・名紋は、私達、国際社会連盟の国連憲章に基づき樹立された、赤い糸政策という世界共通の制度により、国際人類学研究所にて処置を受ける事で眼球に残せます。

・人口の減少が著しい現代において、それを阻止すべく取り入れられた制度です。縁授と呼ばれるシステムで縁のある方同士を出会わせ、婚姻率を上げ、それにより出産率を高め、減り続ける人口を増加させる為に実施されています。

・名紋が浮かばれた方は、国際人類学研究所に補完されている、自身の前世のあらゆる情報を得る事が出来ます（情報の補完期間は1000年）。また、前世、現世で自分が深く関わった人物とは（そ

の人物が生存、もしくは現世に転生している場合は（国際人類学研究所のシステムを介して、コンタクトを取る事が可能です。

- ・名紋が浮かび上がった方は、本人が国際人類学研究所に届け出し、名紋認定を受けてください。これをやらないと今世の記憶を残せませんのでご注意下さい。
- また、検査により自身が名紋保持者かどうかを確認する事が可能で、陽性であれば、その時点で名紋が浮かび上がっていなくとも名紋認定を受ける事が出来ます。

・名紋認定を受けた方は、各人に配付される指輪型情報転送装置を四六時中、所持して下さい。本人が見た情報や物に触れた感覚、考えた事等、あらゆる情報を名紋が蓄積し、綴りを介して国際人類学研究所のパーソナルDBに個人情報として転送、管理されます。この個人情報は他者（研究所内の人間も含む）に漏洩する事はありませんのでご安心下さい。自体も、名紋認識機能を搭載している為、本人のみ使用が許されます。

名紋削除をした場合は、パーソナルDBの記録も削除されます。 予めご了承ください。

2101年4月より実施。

2101年4月より赤い糸税の納金が義務付けられます。

蓮は、パンフレットを読み終えた善治郎の顔を見ず、バカにしたよう引ひつった笑みを浮かべた。

外を見ると雨が止み雲間から陽の光が差し込み始めていた。

『すつげえ胡散臭え！』

先ほどまでの雨がウソのように晴れ渡った初夏の午後。

小紫の花が玄関脇の花壇に咲き薫る喫茶店『華織』は、国道から少し外れた住宅地に申し訳なさげに建っている隠れ家的な飲食店だ。今はランチの時間も過ぎ店の中もかなり落ち着いているが、おばさん店主の専門家も唸らす料理と看板娘であるウエイトレスの美貌でランチタイムには近所の常連や、少し離れたオフィス街からのサラリーマンやOL達でごった返す。12：00～15：00の3時間の戦争が終わり、店内には五、六人の客がいるだけだ。『華織』は入ると左側にカウンターがあり逆側には四人席の丸テーブルが3つ、まっすぐ進んだ突き当たりを右に入ると長方形のフロアがあり、四人席の四角いテーブルが2つ並んでいる。奥のテーブルには二人の男子高校生が向かい合わせに座っていた。一人は眼鏡をかけた、いかにも優等生的な長身の少年で、少し近寄り堅い印象を受けるが、女性が放つておかしさそうな人物だ。もう一人はいかにも劣等生的な少年で少し長めの茶髪を揺らしながらカレーライスを猛スピードで口に挿っ込み、目の

前の優等生に向かつて何か口走つていた。

『ほまへ・・・んぐつ、日頃クールを装つてゐるなら・・・ガツガツ、ほーゆーほひ・・・んぐつ、ゴクツゴクツ、ふはーつ、踊らされるなよ。』

カレーライスを口一杯にした劣等生の蓮は優等生の善治郎に言つた。

『別にクールを装つた覚えはない。そんな事より、口のなかに物を

入れて喋るな。菌が移る。』

『何の菌だつつ……？』

うるさいな、と言いながら善治郎は飲んでいたコーヒー・カップをテーブルに置いた。少し苛立つていても見える。

・ - ん？ - -

何か苛立たせるような事言つたかな、と蓮は思つた。2秒ほどの思考の末、答えが見つかった。

『まつはーん』

蓮は「ヤーヤしながら言つた。

『なんだ？』

『なんだよ、早く言つてくれればいいの……』

『？』

へラへラしだした蓮。それを訝しげに見る善治郎。

『カレー、食べたいんだ - - -』

『こりん。』

「 - なつ? - -

蓮はショックを隠しきれない。

『えーつ? - カレー食いたいんじやないの?..』

『こりんと話している。しかも、お前が食べてるそのカレーライ
スも、そもそも俺の奢りだろ?』

善治郎はテーブルに置いてあるレシートをパリパリと振つてみせた。

『ん? ああ、そつか。』

『馳走様です、と蓮は頭を軽く下げ、善治郎に聞き返した。

『じゃあ、なんでそんなに苛ついてんだ? 腹減つてるんじやねーの
?』

『お前と一緒にするな。それと別に苛ついてなどいない。お前がカ
レーライスを口のなかに含みながらベラベラ喋つて汚いから注意し
ただけだ。昔から一向に治らんな。誰もお前のカレーライスを取つ
たつしないのだからゆつくり食べて、それから話せ。』

『・・・もつ食べおわつました。』

『・・・よろしい。で、なんだ?』

蓮はナフキンで口を丁寧に拭つた後、テーブルの上のチラシを指差しながら話し始めた。

『お前、なんでこんなもんに興味持つてんだ? らしくないだろ? こんな歴史の教科書に載つてた出会い系とかゆーヤツの現代版じゃねーか。お前はどう一訳かモテるんだから別にこんなもんに頼らなくてもいいだろ?』

ほれっ、と蓮は顎で隣のテーブルを差し示した。

その瞬間、隣のテーブルに座つている女子大生一人は気まずそうにうつむいたが、その後もチラチラと蓮達のテーブルの方、というより善治郎を見ていた。

善治郎は、そんな女子大生一人には一瞬たりとも目を向けず、蓮の質問に対し質問を被せた。

『お前はこのチラシを見て何も感じないのか?』

『は? · · · だから胡散臭 · · ·』

『お前、今いくつだ?』

また質問。クイズ番組か? 善治郎の質問の意図がわからない蓮。

『何言つてん · · ·』

『いいから答える。いくつだ?』

『・・・・・ 17歳だよ。』

『今、西暦何年だ?』

『・・・ 2111年』

『お前のない頭使つてよく考えろよ。』

『お前が生まれたのが西暦2094年・・・・・ 縁授が運営開始した
のが西暦2101年・・・・・ 今は西暦2111年・・・・・』

この瞬間、蓮は善治郎が何を言わんとしているかを何となく理解した。

『・・・・・ 最後の質問だが・・・・・』

善治郎は冷めたコーヒーを一口飲んで言葉を紡いだ。

『・・・・・ 何でお前に名紋が浮き出るんだ?』

『知りん』

蓮は自身満々に語つてのけた。

第四章・疑問

善治郎は、自身の発した質問に対しての蓮の言葉に驚きを隠せなかつた。

『知らん? おかしいとは思わないのか?』

『ん? なにが?』

「 - はあ - -

コイツにはもつと噛み砕いて説明してやる必要があるな、と善治郎は使命感に駆られた。

『なにがって、このチラシには縁授というシステムは、前世で記憶をデータベースに保存し、眼球に名紋と呼ばれる自身の名前を残しておくことで、現世に転生した後も名紋が眼球に現れ、それをキーとして前世の記憶を得られるものだとある。という事は、名紋が現れた人間は、前世において名紋を眼球に残す処理を施しているわけだ。だが蓮、お前の場合は生まれたのが17年前、西暦2094年なんだから前世はそれ以前ということになる。だが、名紋を残すのに必要な縁授は5年前に運用されたばかりだ - - -』

『ふあああ

蓮は興味がないのか、大きな欠伸している。

「 - いのヤロウ - -

怒りを無理矢理押さえ込む善治郎。

『・・・眞面目に聞け、蓮。』

『聞いてますよお、善治郎君。ふあ・・・・で、それのなにがおかしいんだ？』

欠伸して涙で濡れた目頭を指で拭い、少し面倒臭そうに聞き返す。

善治郎は続けた。

『縁授を使い、現代の人々は名紋を得て記憶を保存出来るようになつた。ただ、名紋を持つている者の多くは前世ではなく現世で名紋を得ているはずだ。前世で名紋を得て、亡くなつた後現世に転生し、名紋が現れた者もいるとは思うが、まだ縁授は運用されて5年しか経つてないのだから、そんな人間がいたとしても現在その年齢は0～5歳だろう。だが、現在17歳のお前は、現世で名紋を得た覚えもないのに名紋が現れた。計算が合わないだろ？』

『運用開始が5年前でも、縁授自体はもつと昔に出来てたかもしないじやん？』

蓮はちよつとした疑問をぶつけてみた。

「もつと前か。それもあり得る。が・・・・

『運用の12年も前からシステムが構築されていたというのか？システムが出来ているのに何故そんなに運用開始を待つ必要があるんだ？まあいい、とにかくだ。お前、明日辺り人類学研究所に行つて前世の記憶を得て來い。夢の事が何かわかるかもしれない。』

『はあ？なんでだよ！いーつて。お前がなんで俺見た夢なんか気にしてんだよ？ - - -』

もうこんな話やめようぜ、と蓮が言おつとした時、店の玄関が開く音が鳴つた。

『ただいま』

聞き覚えのある声が店内に響く。

帰宅を報告する女性の声が聞こえた瞬間、蓮は忽然と善治郎の前から姿を消した。

・ - - 逃げたか - - -

善治郎は軽く舌打ちをした。

『おかえり、姉さん!』

玄関の方から聞こえる蓮の声。

『あれ、蓮、いたの?じゃあ、善治郎君も来てるんだ?』

・ - 仕方ない - -

続々は明日にするか、と思いながら善治郎は席を立ち玄関の方に顔を出した。

『こんばんは、琴美さん』

『あ、やつぱり善治郎君いたんだあ。こんばんは』

琴美と呼ばれた女性は屈託ない笑みを浮かべ、善治郎に挨拶を返した。琴美は、歳は20歳前後、長めの黒髪一つに束ね、薄化粧だが大きな瞳と長いまつげが印象的な、かなり綺麗な女性だ。

『今日はどうでしたの?もう学校終わったの?』

『今日は土曜だから午前中で終わり。で、帰りの途中で雨降つてきだから、雨宿りだよ。』

『ふーん。・・・そんな事より蓮、また善治郎君に奢つてもらつてないでしょ?ねー?』

優しく穏やかな琴美の瞳が鋭く光つた。

・・めずい・・

蓮と善治郎は見つめあつたと同時に、同じフレーズが頭を過つた。琴美は蓮の生活態度における問題点を発見すると極端に怒りだす。蓮は、それを恐れていた。

『えつ？ ああ、この間、善にカレーの皿をの何たるかを教えてやつた時に、今度お礼に奢ってくれるつて・・・』

蓮はダメ元の嘘を盾にして、防御を固めた。

『・・・ダメよ。アナタが払いなさい。』

蓮にとつては最強の盾が、琴美の鋭い矛により、いとも簡単に貫かれた。

『ううつ』

蓮は呻き声をあげた。

『あ、大丈夫ですよ、琴美さん。蓮に奢るつて言つたのは俺ですか
ら・・・』

善治郎は戦友のピンチに、戦いの真つ口中に飛び込んだ。

『・・・ダメよ。アナタは黙つてなさい。』

言い換えれば、『部外者であるお前は黙つてろ』である。

『ううつ』

善治郎も呻き声。

・すまない、蓮 - -

琴美に見えない角度から、善治郎は挙むジェスチャーで蓮に謝った。

『・・・お金、ないです。』

そんなことはわかつてゐるという表情で、琴美は諭すように蓮に語りかけた。

『いい、蓮。他人がいくらいい顔してお金をあげるとか奢るとか言つてきても、絶対に信用しちゃダメ。まず何か裏があると思ったほうがいい。』

俺が悪いのか、と善治郎は思った。

『・・・・・はい』

・ - - 蓮、お前も肯定するなよ - -

『お金は働いて稼ぐものよ。人からタダでもらうものじゃない。汗水流して、しつかり働いて、その代価として得るもの。あなたもお金の大しさをもつと知らないといけない。だから、蓮 - -

琴美は厨房を指差して蓮に言い放った。

『働いてきなさい』

『・・・・・はい』

避けられない事態に諦めの念を抱いた蓮は、素直に厨房に向かった。

第五章・出逢い

蓮が厨房に入った後、善治郎は一人、座っていたテーブルに戻つて
いた。夕方になり客もちらほら見え始める時刻になつていて、客
が増えるどころか、自分以外の客がいなくなつてゐる事にすら気が
付かない程集中し思索を練つていた。

「…………どうすればヤツを人類学研究所に連れていけるか、だ - -
・・・・難しい顔してどうしたの?』

善治郎は、突然頭上より降つてきた質問に少し驚いて顔をあげた。
視線の先には琴美がお代わりのコーヒーを持って立つていた。

『お代わり、いるでしょ?』

『・・・戴きます。』

『あんまり悩むと、ハゲるわよ』

琴美は、飲み終わったコーヒーのカップをトレイに乗せ、煎れたて
のコーヒーを善治郎の前に置きながら言つた。

善治郎はガタツと音をたて、椅子ごと転びそうになつた。

『アハハツ、冗談よ。』

善治郎は琴美を呆れ顔で見た。

「ホントに、この人は・・・

言いたい事は相手が誰であろうと切る強さ。優しい笑顔の中に、颯爽とした清々しさがあり、凜とした瞳はまるで白馬を見ているような気持ちになる。

「・・・・・アイツにそっくりだな・・

善治郎は、蓮と出会った時の事を思い出していた。

善治郎が、初めて蓮にあったのは中学1年の春。ブカブカの学生服に身を包み、目を好奇心という光で輝かせながら、彼は善治郎に話しかけてきた。

『お前、どこの中学校から来たの?』

『?・・』

十数年前に起こったテロにより日本の人口も激減していた為、大人はもとより、その大人から産まれる子供も当然少なかつた。統合される学校も後を絶たず、学区という言葉も死語となっていた時代である。小学校を卒業した後、進学する中学校は基本的には選べない。同じ小学校生活を共にした仲間にに対する『どこの中学校から来た?』という言葉も本来なら全く意味を持たないはずだが、蓮は善治郎と初対面だった。善治郎はある事情で小学校を卒業すると同時に蓮のいる街に引っ越してきたのだ。

善治郎は少し戸惑った。

彼は他人からこんな風に話し掛けられるのに慣れていなかった。と

いうより、人から話しかけられないように拒絶態勢をとり鎖国ムードを漂わせていたため、その鉄壁のガードをくぐり抜け、言葉を投げ掛けの物好きがいなかつた。

共に国會議員である両親に育てられた善治郎は、家を空ける事の多い両親の目を引く為、両親から褒めてもうるゝ為に常に努力し抜いた。成績優秀、スポーツ万能。皆からは将来有望の声と羨望の眼差し。優越感に浸りつつ、常に己の行動に完璧さを求め始め、それが他者に対しても及んでいった。友人のちょっとした失敗が目に余る。

- - なぜこんな簡単な事が出来ない？ - -

- - なんでこんな時にそんな行動するんだ？ - -

- - もっと効率よく動けないのか？ - -

そんな思いが口をついて出るようになる。友人達は徐々に離れていった。善治郎は皆が離れていく理由がわからなかつた。

- - なんで皆は僕から離れていくんだ？！僕は間違つたことなど何一つ言つてない。 - -

小学5年の頃には、善治郎に近付くクラスメイトはいなくなつていった。善治郎も半ば面倒くさくなり、自ら進んでクラスメイトと接点を持とうとは思わなくなつっていた。逆に、クラス替えの時などは、自分に近付くなと言わんばかりに拒絶オーラを発し、人を寄せ付けなかつた。

- - せつかく友達になつても皆離れていくんだ・・・そんな嫌な想いをするんだつたら、最初から友達なんかいらない。 - -

いつしかそう思つようになつていつた。

担任から息子の学校生活の状況を聞いた両親は、自身が息子に与えた影響など欠片ほども考えず、全てを校内環境や地域環境のせいにした。

「息子に今の環境は適していない。中学は別の地域の学校に行かせよう。」

親の自分勝手な思い込みにより、善治郎は自宅よりもかなり離れた場所にある、蓮と同じ中学校へ進学した。

環境は変われど人の性格はそう簡単には変わらない。小学校時代の出来事により人ととの接点を頑なに拒んできた善治郎は、中学校入学してからも拒絶オーラを纏い、何人たりとも自己の領域への侵入を許さない、はずだつた。その少々ねじ曲がった志しは、入学早々蓮という新たなクラスメイトによつて破られた。

『なあ? どこの学校から来たんだ? 引っ越して来たの?』

『・・・・・』

前の席からの問いかけに無言で返した。

『なあつてば? ー名前は?』

『・・・・・』

完全無視である。瞳にだけは、これ以上話し掛けるなと強いメッセージ

一ジを込めて蓮に送り返している。

それでも蓮は諦めるという言葉を知らないのか、同じような問いかけを繰り返している。

「イツ、バカなのか？拒絶するのがわからないのか？ -

善治郎は、中学生生活第一声を蓮に対して発した。

『話しあげるな』

『むつ？喋れるんじやんーなあ、ビビの小学校だつたんだよ？』

善治郎は半ば呆れた口調で言葉を次いだ。

『話しあげるなと言つてゐんだ。わからないのか、このチビが。』

次の瞬間、窓の開いていない室内に微かな風が吹いた。

善治郎の田の前にいた蓮が消えていた。

第六章・豹変

次の瞬間、左頬に激痛が走ったと同時に善治郎の身体は廊下側の壁に打ち付けられた。咄嗟に受け身を取った為すぐに起き上がり、自分がいた場所に目を移す。

『？！』

そこには先程まで無邪気に話し掛けっていた少年が怒りに体を震わせながら立っていた。

『この野郎。人の事を見下しやがつてえ。』

「な、なんだ、コイツ。豹変しやがつた。」

状況を察しきれない善治郎をよそに、クラスメイトが蓮を押さえつけながら騒いでいた。

『おい、お前蓮を怒らせんなよ！』

『なにしてんだよ蓮！落ち着けって！』

『離せ！ハーロイシの性質を引き直してやるハーロー。』

『やめやめて！おこひ、お前も謝れよ！おこーー？』

クラスメイト四人がかりの拘束を吹き飛ばし、蓮は善治郎に飛び掛かった。

『前の学校でどんな王様だったかしらないけどなあーそんな偉そうな態度じゃ友達できねえぞ！』

『なつてくれなんて、頼んでないだろー。』

カウンター食らわせてやる、そつ思いながら善治郎は一直線に向かってくる蓮の顔面に拳を繰り出した。

鈍い音と共に右拳に衝撃が走る、はずだつた。蓮は空中で体を捻りながら前転し、左足の踵を善治郎の右肩に斧のようこ振り下ろした。

『ドゴー・ジー!』

肩に衝撃が走りうずくまる善治郎に、追い討ちの右フックを繰り出す蓮。が、その一撃は攻撃対象にヒットする事なく、第三者の掌で受けとめられた。

『邪魔すんじや・・・?』

『れーん? アナタなにやつてるの?』

『・・・・・あつ、姉さぶおー!』

ゴシ、とゲンゴシが蓮の脳天に打ち抜かれた。

『姉さん、じゃない。なにやつてるの?』

『えつ? いや、トイツが俺の事をチブバア!』

バキッ、と正拳突きが蓮の顔面にヒットした。

『人のせいにあるんじゃない。』

クラスメイトは皆何かに怯えるように押し黙っていた。

『トーヤが作ってくれたお弁当を忘れたから、せっかく届けにきてあげたのに。ケンカなんてして・・・。』

彼女は善治郎の傍にしゃがみこんだ。

『「じめんなさいね。この子私の弟なの。私は汐華琴美、この子は蓮よ。この子、自分の事、チビって言われると見境無く暴れちゃうのよ。普段は優しい子なんだけど。』

鼻血を垂らした蓮は、『チビ』の単語の部分にピクッと少し反応を示した。

善治郎は服に付いた埃を払いながら立ち上がった。

『ねえ、アナタの名前はなんていの？』

琴美のその問いに、善治郎は鋭い視線で答えた。

『僕に話しかけるな・・』

ドゴッ、とゲンコツが善治郎の脳天に打ち抜かれた。

『初対面の先輩に向かつて何偉そうに言つてるのよー人が名前聞いてるんだから答えなさいよー。』

『や、やめなよ姉さん!』

『「つるせこー」ハイツの腐った性根を叩き直してやるー。』

『×××××××!?』

『×××××××!』

その後、蓮を含めたクラスメイト全員で琴美を押さえ込み、事なきを得た。

それから善治郎は、毎日汐華姉弟に付き纏われた。

興味という一文字の言葉に含まれた、新しい仲間の事を知りたい、とこう汐華姉弟の素直な欲望は、善治郎の心の分厚い氷を溶かした。

一週間経った頃には、善治郎はクラスの仲間とも打ち解けられた。

未だに初対面の相手には無関心を装い、冷たい印象を『ええてしまつが、当時に比べればまだマシなほうだ。

善治郎は「一バーの薰りを楽しみながら、過去の出来事を思い出していた。

『何一やつこてるの?』

琴美は訝しげに善治郎を覗きこんだ。

『ん?・・・いや、琴美さん達に初めて会つた時の事を思い出していたんですよ。』

『あー、あの時の事ね。あれはひどかったよね?窓は割れるわ、教壇も真つ一つになるわ。』

『・・・全部琴美さんがやつたんですよ』

『えつ?蓮でしょ?』

『琴美さんですか』

『えー、うそー?』

疑りの眼で見る琴美に、善治郎は疑問に思っていた事を聞いてみた。

『・・・・・琴美さん』

『え、何?』

『・・・・・。』

『何?どうしたの?』

『・・・・・あなたは一体何者なんですか?』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5106d/>

赤い糸

2010年10月8日14時33分発行